

# 夏休み（彼女のいた夏）



福嶋康紀

Yasushi  
Fukushima  
2016.8.24



夏休み（彼女のいた夏）



## 第一章 プロローグ

僕は、九州の田舎から出てきて、アルバイトをしながら、関東にある美術系の大学に通っている学生だ。

僕には、家族という者はいない。

両親と妹を少し前に、交通事故で亡くしたからだ。

その時、自分は、実家を離れていた。

ある日突然、警察からの電話が掛かってきて、自分が家族を失ったことを知った。

家族で妹の誕生日祝いの食事をしている店に、車が突っ込んできた。

即死だった。

時速百キロ以上の猛スピードで、家族の席にに突っ込んだそうだ。

公務員の飲酒運転が起こした悲劇だった。

その時は、話題性もあって、マスコミによつて大きく取り上げられた。

それでも、三か月もすると、芸能界の不倫騒動や婚約発表なんかの話題で、紙面がにぎわうと、あつという間に周りは静かになつた。ショックで、自分の将来に対しても考えられなくなつていていた時に、偶然、妹の日記が出てきた。

兄は、美術を勉強していくとても尊敬できる人

まだ、絵描きとして評価なんかされていないけど、

私にとつてはあこがれの存在

私も同じ学校を目指したい。

そして、一緒に同じキャンバスを歩きたい。

彼女なんかできたら少しショックだけど・・・など

そんな言葉が並んでいた。

妹はそんな風に見てくれていたんだ・・・そう思うと、ここで落ち込んでいたら、その妹の思いまで消えてしまいそうで、もう一度美大に復帰した。

幸いにも両親が残してくれた家と生命保険などで、アルバイトをしながらであれば、なんとか学生生活がおくれてている。

ただ、家族を失った心の隙間を埋める事は出来ない今まで、明るい青春と云つた学生生活とは、程遠く惰性だけで毎日をやり過ごしていた。

## 第二章 出会い

「お兄ちゃん」

彼女との出会いは、この言葉から始まった。

後で聞いたら、彼女はそんな言葉は言つていらないそうだ。

彼女は、最初から不思議な女性であつたと思う。

授業が終わつた後のアルバイト先であるコンビニを出て、自宅のアパートへ向かう暗い道に、彼女は、寂しそうにぽつんと立つていた。

一瞬、幽霊かなんかと思い、ひるんだが、彼女の背格好が妹に似ていたため、おもわず「希美（のぞみ）」と大きな声で話しかけてしまつた。

声を出した後ですぐ、妹は、もうこの世にいないことを思い出し、「ごめん、亡くなつた妹に似てたので、つい」と謝つた。

その時の彼女の反応は、意外なものだつた。

「そう、・・・・。」

「突然だけど、私、あなたの妹の代わりになっちゃダメ？」

いきなりそんなことを言われて、面食らい戸惑つていると  
「あつ突然こんなこと夜の小道で言われたら、気でも違つてるんじやないかと思うかも  
ね？」

「私、何も思い出せないの。記憶が全くないの。名前も住所も何故ここにいるのか  
も・・・どうしていいか分らない」

そう言つて、泣き出してしまつた。

最初は、美人局かなんかかもと、警戒しそうになつたが、どうも話がちぐはぐで、まつた  
く理解できない。

背格好も妹に似ているが、歳も同じくらいだし、妹は少し幼い顔をしていたが、彼女は、  
そんな妹を少しだけ大人にしたような顔立ちをしていた。

触らぬ神に祟りなしと、思つたが、妹が生きていて記憶を無くしたて訪ねてきたような氣  
がしてしまい、つい、こう話しかけてしまつた。

「僕の部屋すぐ近くだから、付いてくる？」

コックリと頷くと黙つてついてきた。

こんな展開めちゃくちゃだとは思うが、この話、滅茶苦茶なところから始まつたのである。部屋に入つてきて、明るい電灯の下でよく見ると本当にきれいな顔立ちをしていた。

「妹も生きていたら、君みたいな女性になつていたのかなあ」  
つい、口をついてそんな言葉が出てしまつた。

「妹さん、亡くなつたの？」

「うん、生きていたらちょうど君くらいの年頃だ」

そこまで言つて、急に目頭が熱く涙があふれてきた。

彼女は、すまなさそうに

「ごめんなさい」

と言つてきた。

僕は、涙を拭きながら

「ごめん、ごめん。でも何だか、希美が生き返つてきたみたいな気がして、うれしい」

そう伝えると、彼女もにつこりと微笑んだ。

彼女は、本当に妹に似ている。

姿かたちも似ているが、それよりも彼女の持つている雰囲気と云つたものが、よく似ていて。赤の他人と言う気がしなかつた。

「妹さんの名前ですか？希美さんって」

「そう、希に美しいと書いて希美と言う名前だった」

「ところで君の名は？」

「それが、私、自分の名前も住所も何もかも、思い出せなくて、『ごめんなさい』

「あつ、ごめん、今さつき、そう言ってたね。もし、よかつたら、ここに暫くいてくれませんか？」

初対面の女性にこんなこと言っちゃいけないけど、妹がいるみたいで・・・数年ぶりにあの頃に戻ったみたいで・・・

「私も、ほかに頼るところもないし、お願ひします」

そう言つて、その日から二人の奇妙な同居生活が始まつた。

妹や家族を失つた悲しみを埋めるために、アルバイトと授業だけに打ち込んで、友達と一緒にお酒を飲むことなども避けていたので、経済的には結構余裕があつた。そういう訳で、次の日には、彼女を連れて近所の洋品店やスーパーを周り彼女の服やら茶碗などの日常品まで一通り買いそろえた。

近所の人には面倒なので、妹がしばらく一緒に住むことになつたと言う事にしておいた。近所の人には、両親がなくなつたことだけしか伝えていない。

妹が亡くなつたと認めたくなくて妹の事は言い出せなかつたのだ。  
部屋の表札にも天野健一・希美と二人並べて記入した。

ここまでやつて気づいた。

「勝手に君の名前、妹と同じ名前にしちゃつたけど・・・」

「いいんです。その名前、私、違和感がないから」

「私は、あなたの事を何て呼べばいいでしようか？」

「兄妹だから、兄ちゃんでいいよ。妹もそう呼んでいたから。ぜひそう呼んでください。

お願ひします」

「それでは、お兄ちゃん、これから、いろいろお世話をおかげします」と言って、ペコリとお辞儀をした。

それからは、本当の兄弟のように、ずっとそうしてきただように、暮らしていた。学校でも、最近明るいと妙に勘織られたが、笑つてごまかしていた。

### 第三章 初夏の日差しの中

希美は、いつもアルバイトが終わる時間になると、バイト先のコンビニの前で待っていた。

一人で部屋にいてもつまらないのだそうだ。

何故かコンビニの中には、入ろうとはしなかつた。

一人で、出歩いても良さそうなもんだが、記憶が戻らないので、友人を訪ねることもできず、下手に歩き回って、部屋に戻れなくなることの方を恐れていた。

「希美、いつも一人で部屋の中にいてもつまんないだろ？」

と彼女の方を見ながら言つても、

「ううん、そんなことない」

という返事しか返つてこない。

「大学も休みに入つたし、しばらくは、時間が開くので、二人で街に出て、希美の記憶を探そうよ」

「うれしいけど、もし記憶を取り戻したら、健一兄ちゃんと私の記憶は、どうなるのか  
考えると少し嫌だなあ」

「大丈夫だよ。忘れたりするわけないし、兄妹から恋人同士に出世するかも」  
「それなら大歓迎」

と言つて、真っ赤になつてしまつた。

その様子を見て、可愛いと思つたと共に、少し彼女を女性として意識するようになつた。  
そんなことを、振り払うように次の日からは、朝早く起きて、少しでも記憶につながりそ  
うなところに積極的に出掛け行つた。

「兄ちゃん暑い」

と言われば、エアコンのきいた図書館、、結局、避暑を兄弟二人で楽しんでいるだけの  
ような感じだつた。

ある日、青梅の山の川に出かけて行つた時の事、渓谷の川辺に降りて足を水につけた途端、  
希美が急に怖がつたので、びっくりして抱きかかえ落ち着くのを待つた。

「どうした、何か記憶に繋がりそうな事があつたの？」

「ううん、分らない。」

と言つて、しばらく僕の胸に顔をうずめて震えていた。

この時は、何故、希美が怖がつたのか想像もできなかつた。

三十分ほどで元気を取り戻した希美は、近くの食堂に入つて、

「兄ちゃん、これ食べよ」

と、そうめんと書いたメニューを指さしていた。

「何だか懐かしい味がするよね」

と言つたが、そんなはずはない、関東と九州では、めんつゆのだしの取り方が全く違う。

・・・ 麺つゆの出汁は、あご出汁に決まつてゐる。・・・

そんなことを思つたが、

「うん、なつかしいね」

と言つてしまつた。

少し暗くなつてきたので、山を下り明るい駅周辺で時間をつぶした。

青梅から中央線を使って国分寺にまで帰るのに電車ではなく列車に乗り込んでしまい、新宿まで行く羽目になつた。

仕方がないので、最後部の目立たない二人掛けの席で座つていたら、いつの間にか眠つてしまつていた。

少し目を開けかけたら、こちらを見ながらに首をかしげるような姿が見えていた。しかし、気に止めずにもう一度眠りに引き込まれていつた。

## 第四章 北へ

青梅から戻った次の日は、いつもと同じように、手掛けりのありそうなところへ、手当たり次第に出かけて行つた。

交番なんかに行つて聞いてみればすぐにわかりそうなもんだが、なんとなく交番へ行つてしまつたら、二人の関係をうまく理解して、もらえないような気がして、避けていた。

一度だけ、足を向けていつたのだが、道を尋ねる人や落とし物を探している人なんかが多くて、タイミングが合わず、警官の目にも止まつていないので、それからは、ずっと避けている。

原宿の竹下通にあるカフェで、彼女が東北なまりの女の子の会話を聞き、何か少し引っかかるものがあるようなので、北へ行つてみようと言う事になつた。

最近は、切符など買わなくてもスマートフォンが一台あれば、乗り物に乗るのには困らない。

一人分でも二人分でも銀行の口座で決済してくれるらしい。

そう言う事で、行き当たりばつたりの旅行が始まった。

宿泊先のホテルでさえ全く人と顔を合わせることがなかつた。

おかげで、希美と二人で同じ部屋で寝泊まりしても変な詮索を受けて嫌な思いなどしなくて済んだ。

二人、ホテルの同じ部屋の別々のベッドの上で、話し込んでいた。

「お兄ちゃん、なんか新婚旅行みたいだね」

「ほんとだ」

よくよく考えてみれば、兄妹ではない。

つい数か月前までは、見知らぬ縁もゆかりもない男と女だつたのだ。

今は、実の兄妹、いや恋人未満と不思議な関係である。

「希美 東北弁の事、身近に感じるのかい」

「うん。なんだか自分の育つたところで聞いていたような安心感があつたんだ」

「何か手掛かりが見つかるといいね」

そう言つて、部屋の明かりを消した。

朝になつて、午前中の早い時間にホテルを出発して、町の商店街などで聞き合わせてみることにした。

店の中に入つては、

「この子の住んでいた場所を探しているんです」と言つて振り返ると  
彼女は、きまつてそこには居なかつた。

別の店を見て回つてゐるらしく、本人を見せられないで、手ぶり身振りの話をしてみた  
が、まったく手掛けりはなかつた。

そんなことの繰り返しを一日中やつていたら、八百屋のおかみさんの方から話しかけてき  
てくれて

「この辺じやなくて、太平洋側が数年前の大地震で被害が大きかつたから、そんな娘さん  
の情報も見つかるかもしれないよ」

「ありがとうございます」

「いいよ、いいよ、あんたも大変だね」

そう言つてくれたので、明日その場所へ移動してみようと考えた。

「どこにいたの？肝心の時にいなーんだもん」

「いたよ」

と、怪訝そうな顔をして、返事をしたが、すぐに気を取り直して  
「ごめんね」と素直に言われ、つい

「いいよ」と言ってしまった。

「今日はこれくらいにして、明日は、太平洋側の海に面した地域をあたってみようと思う  
んだ」

「大きな津波に襲われたから、行方の分からない人の情報も集まりやすいし  
そう言つたとき、彼女の顔が少し曇つたような気がしたので、

「どうかしたの？」

と尋ねたが

「なんでもない」

と言つて、腕を絡めて甘えてきたので少し自分の胸の鼓動が大きくなつたような気がした。

もう一泊ホテルを延長して、明日に備えて二人で早めにベッドの入つた。

「ここ」のホテルなぜか最初から、

「ツインの部屋は、もつたいないよ」などと

勝手な事を言っていたが、強引にツインベッドの部屋にしてもらっていた。

## 第五章 三一一

その日の朝は、いつもより早かつた。

彼女は、健一の腕を掴んだままの移動だつた。

僕は、彼女が甘えているのは、昨日の夜の事があつたからだと思つていた。

ある大事故のあつた福島県の原子力発電所から、五十キロくらい離れた砂浜にやつてきた。そこまでやって来て、彼女は、今までに見せたことのない確信に満ちた表情で、ゆっくりと話し始めた。

「お兄ちゃん、よく聞いて、私、あの日の事を昨日の夜に思い出したの、そして、今日ここにきて確信をもつたから話すね。

あの日は、高校の授業が終わり友達と一緒に列車で帰つている途中だつた、突然、地面が下から突き上げるように動き、それは、時間と共に加速度がつくように大きな揺れにまでなつたわ、そのあと揺れは、横に大きく揺れて、止まっているその列車さえ

も気が付いたら線路のわきに弾き飛ばされていたの、幸い横倒しにはならず真っすぐのまま線路わきに跳んだ感じだつたわ。

もう、皆パニックになつてしまい、津波が来るつてだれかが、叫んだの、そしたら、みんな昔からの言い伝えを思い出して、津波の事はある程度心構えがあつたので、冷静さを取り戻す事が出来たの、そこからは、みんな助け合うようにして列車から降り、車掌の指示で最寄りのもつと高い丘の上を目指した、三十分か一時間か、もう時間の感覚もなくなつていたけれど、沖の方から黒い大きな壁が、こちらを目指して迫つてくるのが見えて、とても恐ろしくて、ただ、ただ震えていた。

そんな時だつた。誰かが叫んだの、子供が逃げ遅れているつて、その指さす方を見たら、軽トラックの荷台の上で、泣き叫んでいる小さな女の子を見つけたの、まだ保育園に行つているくらいの小さな子だつたわ。

誰もかれもが、もう間に合わないと、言つて神仏に願つているような状況だつたから、自分でもそう思つていたわ。でも、人間の行動つてわからないものよね、私、その女の子めがけて走り出しちゃつた。

夢中で、その子を抱え上げた時には、もう数メートルのところまで、津波がやつてきていた。

当然、もう助からなっておもつたわ。

女の子を抱え、出来るだけ腕を高く上げて最後の抵抗をしていたの。

水が足元に触れた時だった、いつの間にか、頭上にやつてきてくれた救助ヘリの自衛隊員が、その女の子を抱きかかえてくれて、・・・。

そこで安心したここまでで、私の命は終わつたみたい。」

「今、思えば、あの時、家族や友達にも、さよならが言えなかつたし、年頃なのに男の人を好きになる経験もないままだつた。

きっと、そのことが原因で成仏できずに彷徨つっていたのね。

そうしたら、健兄ちゃんに出会えたの。でも、これで私の人生は、本当におしまいみたいだわ。健一兄ちゃんありがとう」

そう言つて、彼女の足が波に触れたら、ゆっくりと波の音と共に、光の細かな粒になつて月明かりの闇に消えていった。

僕は、駆け寄つてその光の粒を捕まえようとしたが、それは虚しいだけだった。

その光は、するりと逃げて、空間に吸い込まれていった。

僕は、大声をあげて泣き叫んでいた。

しばらく、そこに立ち尽していたが、せめて彼女の正確な名前と住所を知りたい。

そして出来る事なら、彼女の家族を見つけて、このことを報告してあげたいとも思った。

彼女がここで津波に襲われたという事と、彼女が助けた女の子がいると言う事から、地元の図書館の資料や彼女の事を書いた当時の新聞記事などで、すぐに彼女の事は、調べる事が出来た。

彼女は、地元の高校に通うごくごく普通の高校生だった。

希美と言う名前に違和感がないと言っていたのは、彼女の名前も偶然、希美と言う名前だつたからだろう。

いや、偶然とは言えないかもしれない、彼女の事を書いた当時の新聞記事で、彼女の兄の名が僕と同じ健一だつたから・・・。

将来の夢は、保育士になりたかったそうだ。

とても素直な女性で、兄と二人兄妹で、両親と共に暮らす仲の良い幸せな人生を送っているらしい。

彼女が助けた女の子は、今年、小学校の三年生になったようで、将来は、彼女と同じ夢、保育士になつて助けてくれたお姉さんの分を生きると言つているそうだ。  
救助した自衛官は、彼女が、子供を自分に託したときに「お願ひします」と言つていたようを見えたと言つた記事が残つていた。

その記事の続きを、彼女の家族もこの津波の犠牲者であつたことを追記してあつた。

彼女も自分と同じように一人ぼっちだつた。

ここまで調べて、もう一度、彼女の消えた浜辺に行き

「君が生きていた証は、しつかりと残つていた。君が助けた女の子は、君の夢を受け継いでくれている」

と告げて帰つてきた。

## 第六章 真実

彼女の事を詳しく述べて、今度は、自分の実家に帰つて、妹や両親の事などもう少し整理しなければと思い、郷里の九州の田舎に帰省した。

実家は、そのままだつた。

庭には、草が多い茂つていたし、まったく掃除をした気配もない空家同然だつた。

事実、自分も大学に入つてからずつと帰つていなし、空家なのだが、荷物なんかはそのまま残してある。

鍵を開けて中に入ると、そこは葬儀の後片付けをした時ままに、生活感の全くない空間が広がつていた。

妹の部屋に入つてみた。

そこには、彼女の姿がないだけで、今にも部屋のドアを開けて、

「お兄ちゃん、勝手に人の部屋に入らないでよ」

と言われそうだつた。

でも、その声の主はもうこの世にはいない。

そう考へると、涙がこぼれてきた。

妹もいなし、彼女もこの世界にはいなくなつてしまつたし、孤独感がその空間を支配していた。

そうして、雨戸をあけ、縁側に腰かけて荒れた庭を見ながら考へた。

仏様に線香も上げていない・・・

自分の家族の遺影に手を合わせることに抵抗があつた。

まだ家族の死を受け入れていないのだろう。

そう言へば、近所に住む親せきも自分の帰省に気が付いてい無いようだつた。

そのうち、気づいて声をかけてくれるだろう。

この家には仏壇と言うものはない。

別に宗教的な問題ではなく、ただあの時まで必要がなかつたのである。

ただ家族の写真が遺影として線香立ての前においてあるだけだ。

その遺影の写真を見て、本当に別の写真はなかつたのかと思つてしまふ。

家族四人の笑顔の集合写真である。

この写真の笑顔は、とても幸せな家族の写真だが、遺影なのに残った自分まで写っているのは変だと思った。

その写真の事を思っているときに、玄関の引き戸から人が、入ってくる気配がしたので、隣の親せきが気付いてやつてきたのだと思い。

急いで、玄関の方へ向かった。

しかし、そこで自分を待ち構えていたものは、思いもよらぬ人だった。

希美 そうあの福島の浜辺で、光の粒になつて消えた彼女の希美が立っていたのである。しばらく、その状況が理解できなかつた。

すると、希美が口を開いて説明してくれた。

「今から話すことを落ち着いて聴いて欲しいの」

「いい？」

呆気にとられたままで、うなずいた。

「私があなたのもとに現れたのは、自分の事を探るためではなかつたの、人は死んだら、誰かがお迎えに来ることになつていて、あなたの家族は、別の人たちがあの世へ案内していつたわ。でも、あなたを迎えて行つた私がこの世に未練があり過ぎて、あなたを迎えて行つたところで記憶と使命を忘れてしまい、迷える魂になつてしまつた。」

「あなたは、自分が死んだことにまったく自覚がないまま、魂が人に見える形になつて、この世にとどまつていたの。だから、半分くらいは、現世の人と会話出来たりした。ただ私の姿は、あなたにしか見えてはいなかつた。」

「でも、あなたのおかげで、私の未練も見つけたし、あなたが私の大事なパートナーだと言う事も見つけたわ」

そう言つて、僕の腕にしがみついた。

「そうか、あの時、僕も家族と一緒に自分も死んでいたのか。だから、あそこの遺影がみんなの集合写真だつたんだ。」

「それじゃ僕とかかわつた大学の仲間たちは？」

「健一兄ちゃんは、実体のあつた魂だから、しばらくの間、彼らの記憶の中には残るけど、それが何だったのかは徐々に記憶の中から薄れていくはずよ」

「そうなのか、少し寂しいな」

「でも、これからは、私と兄ちゃんは、ずっと一緒なの、普通はお迎えに行つたからといつて、ずっと一緒にいなければ、二人とも彷徨える魂のまま、この世で過ごしちゃったし、生きていたら、一生に一度の大変なパートナーになつていたはずだつたの、だから特別な関係が出来てしまつたという訳ね」

「それじゃあこれからは、孤独じゃなくなるつてことか」

「そう言つて、につこりとした。

「それじゃあ、そろそろ、あの世とやらへ行きましょうか」

そう言つて立ち上がつたら、明るい光の粒になつて、二人の姿が消えていつた。後には、また生活感のない空間が広がつていていただけだつた。



## 第七章 エピローグ

あと少しで、盆になろうかという時期、ガラガラと引き戸の空く音がして、隣に住む親せきが、入ってきた。

「天野さん一家が亡くなりんしゃつて、今年でもう丸二年になるね」

「三回忌過ぎたか」

「あの兄妹は、ほんに仲のよか子たちやつた。もつと長う生きていて欲しかつたとやばつてんね」

「そろそろ盆の来るけん、お供え物ば、あげとこうか」

「この家も継ぎ手のうなつたけん、何れ取り壊すことになるとやろうばつてん、子供たちの笑い声が今でも聞こえてきそうな気がするとよ、出来るとなら、このままにして欲しいかねえ」

遺影の飾つてある場所にいた叔父が

「あら誰か、この家訪ねてきんしゃつたとね」と尋ねると

「そげなはずなかよ。鍵は私しか持とらんけん」

「そう隣の家の遠い親戚のおばさんが言つて

「でも線香の新しかよ、この写真も一家四人ときれいかお嬢さんが健一ちゃんと腕を組んで幸せそうに写つとんしやあよ」

「本当やん」

「どれどれ、見してみんしゃい」

「あらあ、本当に不思議なことのあるもんたい」

いつの間にか、近所の幼馴染やら同級生なんかも集まつてきていた。

「それにも、なあも気味が悪くないとは何でかいな?」

「健一ちゃん、あの世から彼女連れて盆に返つて来んしやつたとかもしれんよ」

「それじや一つ」

と言つて、線香をあげてみんな手を合わせていつた。

「そういやあ、この家は、初盆に主がおらんかつたけん、盆踊りばしとらんかつたね」

「今年の盆は、この家の前庭で、みんなで盆踊りばしようか」

「そうやね、そげんしよう。」

近所の幼馴染も同じように

「今年は、健一ちゃんちで盆踊りば、みんなでしようや」  
いつの間にか、人の賑わいがそこにあつた。

遺影の中の僕と彼女が、お辞儀をした事と外で蛍が、二匹連れそつて舞い上がりついた事には、誰も気が付いてはいないようだつた。

完

※

著者

福嶋康紀

発行

福岡市南区野間四丁目27-17

美工房

この著作物には、著作権があり法律で保護されております。  
著作者に無断での複製・改編・発行などは出来ません。